

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：17201
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K02258
 研究課題名（和文）モデレート啓蒙主義の再考ーメンデルスゾーンにおける啓蒙と宗教の両立可能性

研究課題名（英文）Rethinking on the Moderate Enlightenment -Compatibility between Enlightenment and Religion in Moses Mendelssohn

研究代表者
 後藤 正英（Goto, Masahide）
 佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：60447985

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：著名な歴史家ジョナサン・イスラエルは、啓蒙主義におけるラディカル（急進的）とモデレート（穏健的）の対立関係を重視し、ラディカル啓蒙主義こそが現代の民主主義社会を生み出したのだと主張した。それに対して、本研究課題では、18世紀ドイツのユダヤ哲学者モーゼス・メンデルスゾーンの啓蒙思想に注目することで、モデレート啓蒙主義も現代の自由で多様な社会の成立に大きな影響を与えていることを明らかにした。ファイナーやゴットリーブが指摘するように、メンデルスゾーンが展開した様々な議論は、現代のイスラエルが抱える文化闘争や、現代の欧米における移民問題の先駆的な形態であるといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メンデルスゾーンのモデレート（穏健的）啓蒙主義の立場は、啓蒙主義が作り出した諸概念（理性・自由・寛容）は、狭義の世俗性を欠いていたとしても存立しうるものであることを示している。ユダヤ教と西洋近代を両立させようとしたメンデルスゾーンのプロジェクトは、現代ヨーロッパのムスリムの移民をとりまく諸問題を考える際にも、大きなヒントを与えるものである。

研究課題の遂行中には、ユダヤ啓蒙主義やユダヤ思想の研究分野で世界的に著名な研究者を招聘し、研究交流の国際的ネットワークを広げることができた。さらに、講演原稿の翻訳を雑誌に掲載したことで、最新の研究成果を日本語で読める環境を整備することができた。

研究成果の概要（英文）：The eminent historian Jonathan Israel emphasized the oppositional relationship between radical and moderate stream in the Enlightenment. He argued that the Radical Enlightenment produced the modern democratic society. In contrast, by focusing on the Enlightenment thought of Moses Mendelssohn, the Jewish philosopher in 18th century Germany, this research attempts to show that the Moderate Enlightenment has also a significant impact on the establishment of a free and diverse society today. As Feiner and Gottlieb, who are specialists in this field, point out, the various arguments developed by Mendelssohn are the forerunner of the cultural struggles of contemporary Israel and the immigration debate in Europe and the United States.

研究分野：思想史

キーワード：メンデルスゾーン 啓蒙主義 ハスカラ 寛容 ジョナサン・イスラエル 世俗 ユダヤ教 マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

2013年度から15年度にかけて、ヤコービの論争スタイルに関する研究(若手研究B:F.H.ヤコービの哲学論争と表現方法の研究)をおこなった。ヤコービは、18世紀末のドイツにおけるスピノザ・ルネサンスに火をつけた人物である。ヤコービは、スピノザ哲学を一元論に基づく合理主義の体系の典型として把握した。スピノザの哲学は伝統的な宗教観や道徳観と対峙する内容をもっていたが、ヤコービは、スピノザ哲学がもつラディカリズムを、そのままの形で提示した。それに対して、メンデルスゾーンやヘルダーなど、他の哲学者たちは、スピノザを受容する際に、部分的に修正を加えることで、その衝撃を緩和しようとした。

このスピノザ解釈の違いは、有名な歴史家のイスラエルの区別に倣うなら、ラディカル(急進的)啓蒙主義とモデレート(穏健的)啓蒙主義の違いに対応する。イスラエルによれば、啓蒙主義研究において重視されるべきは、国や地域による違いよりも、ラディカルとモデレートの対立なのであり、伝統と折り合いをつけようとしたモデレート啓蒙主義ではなくて、思想や表現の自由を重視し、既存の秩序を全面的に告発したラディカル啓蒙主義こそが、現代世界の民主主義を生み出したのである。こうしたイスラエルの指摘は興味深いものであるが、私は、モデレート啓蒙主義にも、ラディカルとは異なる現代的意義があると考え、18世紀ドイツの哲学者メンデルスゾーンは、モデレート啓蒙主義の一員とされる人物であるが、彼自身がマイノリティのユダヤ教徒であったことが、その啓蒙思想に独自の色合いを与えている。以上の経緯から、モデレート啓蒙主義の歴史的事実と現代的意義を明らかにする研究に着手することになった。

2. 研究の目的

近年のヨーロッパ啓蒙主義研究では、ラディカル啓蒙主義に注目が集まっている。この場合、ラディカル啓蒙主義を代表するのはスピノザ主義であり、合理化・世俗化の推進役として宗教に対して批判的な姿勢を取る点に、その特徴があった。モデレート啓蒙主義は、啓蒙的でありながらも、宗教的伝統や既成の社会制度の全てを変化させようとするわけではない立場のことを指す。ラディカル啓蒙主義研究では、こうしたモデレートの立場に啓蒙主義としての不徹底さを見るわけだが、逆に言えば、ラディカル啓蒙主義によるモデレート啓蒙主義の理解には一面化やステレオタイプ化の問題が伏在していないのだろうか。特に、再考すべきは、ラディカル啓蒙主義の宗教理解である。ラディカル啓蒙主義が主張するように、啓蒙と宗教は必ず対立するものなのだろうか。啓蒙近代がもたらした重要概念(理性、自由、寛容)は、常に非宗教的かつ世俗的であるとは限らないのではないか。たとえば、キング牧師やマララ女史の背景にある宗教性が、その分かりやすい実例となるだろう。

本研究は、啓蒙主義におけるラディカルとモデレートの対立に注目することで、啓蒙と宗教を両立させようとしたモデレート啓蒙主義の歴史的事実と現代的意義を明らかにすることを目的とする。特に、モデレート啓蒙主義の具体例として、18世紀後半のユダヤ啓蒙主義を代表する存在であるモーゼス・メンデルスゾーンの思想に注目したい。メンデルスゾーンは、スピノザと同じく、近代社会と直面したユダヤ教が抱える様々な問題を自覚していた人物である。彼は、近代の思想や制度を積極的に吸収しながらも、スピノザと異なり、ユダヤ人の共同体の一員にとどまり、律法を遵守する生涯を送った。その伝統との関係性は、モデレートと呼ばれる性格をもっているわけだが、それは単に守旧的な態度としてのみ理解すべきものなのだろうか。

以上の問題意識を背景にしつつ、本研究では、過去の様々な啓蒙思想研究とユダヤ思想研究の成果を統合する形で、モデレート啓蒙主義の解明を行う。

3. 研究の方法

海外の研究者との交流、国内外での資料調査、文献収集、研究発表を通して、研究をおこなった。

研究期間中には、メンデルスゾーンとユダヤ啓蒙思想に関する著名な研究者であるシュムエル・ファイナー教授(バルイラン大学)とミハヤ・ゴットリーブ准教授(ニューヨーク大学)を招聘して、東京と京都で国際シンポジウムを開催した。ファイナー氏は、メンデルスゾーンのバイオグラフィーの執筆者であり、ハスカラー(ユダヤ啓蒙主義)に関する歴史的研究で世界的に著名な研究者である。*The Jewish Enlightenment* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2003)などの著作が広く知られている。ゴットリーブ氏は、近年の英語圏におけるメンデルスゾーンやユダヤ思想研究をけん引する存在である。主著の *Faith and Freedom. Moses Mendelssohn's Theological Political Thought* (New York: Oxford University Press, 2011)の他にも、メンデルスゾーンのユダヤ関係の著作に関するアンソロジーや、代表的な研究者を集めたメンデルスゾーンに関する論文集を刊行している。ファイナー教授とは、2015年にロッテルダムで開催された国際18世紀学会で面識を得ており、本研究課題を開始する時点で既にコンタクトを取ることが可能な状態にあった。

国内の学会では、日本宗教学会、京都ユダヤ思想学会、日本ユダヤ学会を中心に、研究成果を発表し、研究者間での意見交換を行った。資料調査については、私は、今まではドイツの図書館

を利用することが多かったが、今回の研究では、アメリカのニューヨークにあるユダヤ関連のアーカイブや図書室を訪問した。

4. 研究成果

一年目の研究成果

一年目の夏から、ファイナー氏とゴットリーブ氏を招聘するための準備作業を開始した。当初は、三年目に招聘する計画を立てていたが、先方の事情により、二年目に招聘することになった。

9月に東京大学で開催された日本宗教学会では、伊原木大祐氏の主催によるパネル「二〇世紀ユダヤ哲学再考 政治と宗教のはざま」に報告者として参加し、「ユダヤ教の倫理的評価の転回 ユダヤ・カント主義を中心に」というタイトルの報告を行った。私以外の報告者は、伊原木氏、佐藤貴史氏、松葉類氏であり、合田正人氏がコメンテーターを担当した。

私の報告内容は以下の通りである。過去において、ユダヤ教は不道徳で倫理を欠いた宗教として攻撃されることが常であった。しかし、20世紀後半になると、レヴィナスに代表されるように、ユダヤ教がもつ倫理的性格に多くの人々の関心が集まるようになった。ここに見られるのはユダヤ教への倫理的評価に関する大転換である。ユダヤ教の倫理性を強調する議論の背景には、ユダヤの思想家たちによるカント哲学への接近という現象が大きな役割を果たした。よく知られているように、カント自身は、道徳宗教の観点からユダヤ教に対しては低い評価を下していたわけだが、それとは対照的に、多くのユダヤ思想家たちは、カントの道徳哲学のうちにトラーに通じる道を見出したのである。

本報告では、特にコリウス・グットマンやヘルマン・コーヘンの議論を分析した。この報告で取り上げたユダヤ思想家たちは、メンデルスゾーンより後の時代の人物たちであったが、カントとユダヤ思想のアンビバレントな関係を考察することは、同時代人の啓蒙主義者であったカントとメンデルスゾーンの関係を理解するうえでも極めて有益である。

二年目の研究成果

7月上旬にファイナー氏とゴットリーブ氏を招聘し、市川裕研究室（東京大学）、日本ユダヤ学会、ならびに京都ユダヤ思想学会の共催により、「ユダヤ啓蒙思想とモーゼス・メンデルスゾーン」と題して東京と京都で講演会を実施した。まず、7月1日に東京大学で、市川研究室のご協力により、最初の講演会を開催した。ファイナーの講演タイトルは「ユダヤの伝統への挑戦 - 18世紀ヨーロッパにおける楽しみ、文化変容、世俗化」であり、ゴットリーブ氏のタイトルは「モーゼス・メンデルスゾーンの現代性 少数派への教訓」であった。向井直己氏と市川裕氏に、それぞれの講演への代表質問者としてご登壇いただいた。ギブソン松井桂子氏には通訳をご担当いただいた。開催にあたっては、特に市川研究室の青木良華氏と李美奈氏にお世話になった。

続いて、7月8日には、同志社大学にて京都講演会を開催した。開催にあたっては、同志社大学の小野文生氏に多大な協力を得た。ファイナー氏の講演タイトルは「モーゼス・メンデルスゾーン - 神話、歴史、宗教的寛容を求めるユダヤ教徒の闘い」、ゴットリーブ氏のタイトルは「ドイツのユダヤ哲学が辿った二つの道：モーゼス・メンデルスゾーンとフランツ・ローゼンツヴァイク」であった。京都講演会の折には、大雨により、予定していた通訳者とコメンテーター（細見和之氏）が参加できない事態も発生したが、柔軟に対応した。代表質問者は私が担当し、細見氏の質問も代読した。

滞在中には、二回の講演会以外にも、日本の研究者との間で多数の交流の機会を設けることができた。東京では、武井彩佳氏（学習院女子大）、鶴見太郎氏（東京大学）、斎藤渉氏（東京大学）の三名との交流の場をもつことができた。京都では、アダ・コーヘン氏（同志社大学）の招待により、同志社大学一神教学際センターを訪問し、意見交換の場をもつことができた。センター訪問時には、北村徹氏と天野優氏のお世話になった。さらに、京都では、小野文生氏（同志社大学）、向井直己氏（京都大学）、手島勲矢氏（関西大学）の三名との研究交流の機会をもつことができた。ファイナー氏、ゴットリーブ氏、両名とも、日本におけるユダヤ研究が活況を呈しているとの印象をもって帰国されたようである。

以下、講演内容の一部を紹介し、本研究課題にとっての意義について確認したい。ファイナー氏の東京講演は、世俗的快樂の肯定という問題を中心に、啓蒙主義がユダヤ人社会に与えたインパクトを様々な側面から明らかにするものであった。講演の中では、ラビ・エムデンが、カフェでコーヒーを嗜むことについて魅了されつつ葛藤を抱えていたことや、マルクス・ヘルツと結婚しサロンを主催したことで知られるヘンリエッテ・ヘルツが、女性としての自由な自己表現に熱望を抱いていたことなど、興味深いエピソードが多数紹介された。本講演では、ファイナー氏は、通常はドイツ哲学の文脈でのみ紹介されるメンデルスゾーンの初期の感覚論が、世俗的快樂の許容をめぐるユダヤ人たちの議論を背景にしていることに言及した。この点は私にとって極めて貴重な示唆を与えるものであった。ファイナー氏は、東京講演の末尾では、メンデルスゾーンが渦中にいた近世ユダヤ人の経験は、現代イスラエルのユダヤ人たちが抱える様々な議題（普遍主義と個別主義、ユダヤ人と異邦人、伝統と革新、宗教的指導力と世俗的指導力、科学の知識と聖書、保守主義と自由主義、集団主義と個人の自由など）の始まりであったことを指摘した。

ファイナー氏は、京都講演でも、この議題をめぐる論争が、現代のユダヤ人たちの抱える文化闘争のはじまりであったことを強調した。京都講演では、ファイナー氏は、メンデルスゾーンが宗教的寛容を求める闘いに積極的に参画していた点に注目した。メンデルスゾーンの闘いは、外部の非ユダヤ人社会と内部のユダヤ人社会の双方に向けられていた。当時、ユダヤ人社会の内部では、共同体の指導権をめぐるラビとマスキリーム（啓蒙主義者）の間に激しい対立が発生していた。ファイナー氏によると、ユダヤ人の師弟に世俗的教育を導入しようとしたヴェセリが頑迷なラビたちから攻撃を受けた際に、メンデルスゾーンはヴェセリと連帯して共同戦線を張った。ラビの特権階級と対立するメンデルスゾーンは、単なる現状肯定論者ではなくて、積極的に改革を求める闘士としての姿を示している。メンデルスゾーンは、ヒューマニズムに基づいた自由主義的なユダヤ教への道を開いたのであり、この点に関しては、モデレート啓蒙主義が現代への通路を開いたものといえるだろう。

続いて、ゴットリーブ氏の東京講演の内容にも言及しておきたい。ゴットリーブ氏は、東京講演において、かつて私が執筆した論文「近代ユダヤ教と宗教的寛容 - 啓蒙主義的排外主義という逆説」(JISMOR, 2007年)に回答する形で、マイノリティの市民社会への受容を促進するためにメンデルスゾーンが展開した議論を詳細に分析した。ゴットリーブ氏はメンデルスゾーンの議論を次の六つに分類した。

- 第一：ユダヤ人を非人間的に扱うことは、人間であることを市民権付与の基礎とする啓蒙主義の原理に矛盾する。
- 第二：国教のもとに諸宗教をまとめることは不寛容である。
- 第三：ユダヤ人を受け入れることは、経済的、文化的、倫理的に国家に利益をもたらす。
- 第四：ユダヤ教の内部も改革を進める必要がある。
- 第五：ドイツ国家への帰属性を、人種や宗教ではなくて、コスモポリタンの理解する必要がある。
- 第六：自分たちの民族や宗教の違いを市民権と交換してはいけない。

結論部分で、ゴットリーブ氏は、上記の議論のうちの特に三から六は、今日のマイノリティをめぐる議論にとって新しい観点を提供するものであることを指摘した。講演原稿を雑誌に掲載する際に追記した文章の中で、ゴットリーブ氏は、メンデルスゾーンのアプローチは、ナチス・ドイツのようにマジョリティが極端な形で排外主義的になったときには脆弱かもしれないが、より安定した時代においては、マイノリティが社会の場所を得るためのロードマップを提供するものであることを述べている。この発言は、講演会の折に市川氏から投げかけられた質問に答えたものであり、モデレート啓蒙主義の限界と可能性の双方に関係している。

三年目の研究成果

三年目には、二年目の講演原稿を『京都ユダヤ思想』と『ユダヤ・イスラエル研究』に掲載することができた。翻訳の労を取ってくださった協力者の方々（鳥越覚生氏、加藤哲平氏、石黒安里氏）に心より感謝申し上げます。

9月と10月には、二つの学会で研究発表を行い、メンデルスゾーンの啓蒙思想の独自性について明らかにした。9月には、日本宗教学会（帝京科学大学）で「不寛容を生き抜く技法 - メンデルスゾーンとラーヴァター事件」というタイトルで研究発表をおこなった。この発表では、ラーヴァターからの改宗要求に対するメンデルスゾーンの発言を分析することで、メンデルスゾーンの寛容論の特徴を分析した。メンデルスゾーンはその知名度が高まるにつれて、これほど深くヨーロッパ文化を吸収した人物がなぜキリスト教徒でないのか、という問いに翻弄されることになった。その最も象徴的な事例が、ラーヴァター事件である。スイスの牧師ラーヴァターは、メンデルスゾーンに対して、キリスト教への公開改宗要求をおこなった。ラーヴァターはスイスの哲学者ボネの著作をキリスト教の真理性を証明する著作であると捉え、その独断の冒頭で、メンデルスゾーンに対して、ボネの著作を反駁するか、反駁できない場合はキリスト教へ改宗せよ、と迫った。この場合、ボネの論争を正面から反駁することはキリスト教からの大反発を招くおそれがあったし、ボネの論争を論駁しないことは、ユダヤ教の劣位を暗黙のうちに認めてしまったものと受け取られかねない危険性があった。

メンデルスゾーンは、しばし熟考した後で、宗教論争を避ける理由を説明する形でラーヴァターへ応答した。メンデルスゾーンは、それぞれの宗教が大なり小なり有している偏見については、道徳的に直接危害を与えるものでないならば、寛容に対応すべきであると主張する。さらにメンデルスゾーンは、「ある教義がわれわれには偏見に見えるという理由で、公の場でそれらを論駁することは、建物が堅固で安全であるかを調査しようとして、建物を下支えせずに、地面を掘りかえすのと同じことです」と述べる。つまり、宗教文化は多様な要素が有機的に連関することで全体を形成している以上、一つの要素を強引に切除することは、別の要素に思わぬダメージを与える可能性があることを指摘するのである。

このような自他の偏見に対する寛容の態度は、メンデルスゾーンのモデレートな啓蒙思想の特徴をよく表現している。メンデルスゾーンの穏健的立場は、彼の自己批判の精神の現れであり、単なる現状肯定ではない。彼は、独断論者と懐疑論者の間で中道の道を取ることを宣言する。メンデルスゾーンによると、宗教や倫理については、一方で、徹底した吟味の結果として、自分の

確信に自信をもつべきだが（これが独断論である）、他方で、他者を裁く必要がある場面に遭遇した場合には、自分の確信に対して懐疑精神をもち、安易に他者に押し付けないようにする必要があるので。メンデルスゾーンは、一方で、諸宗教の共通の基盤としての理性を強調しつつ、他方では、他の宗教文化が理性の他者にとどまり続ける点について、きわめて自覚的であったといえる。これは彼の啓蒙理解の先進性を示すものであるといえる。

10月には、日本倫理学会（山口大学）にて「道徳の進歩をどのように理解すべきか - カントとメンデルスゾーンの議論から考える」というタイトルで研究発表をおこなった。歴史における人類全体の道徳的進歩を語るカントとは異なり、メンデルスゾーンは、個々人の人生における道徳の向上は存在するが、人類全体について道徳の進歩は存在しないと主張した。メンデルスゾーンは、道徳の到達点とされるものへの接近の度合いによって、様々な文化や宗教に序列をつける発想を批判したのである。今日、スティーブン・ピンカーのように、啓蒙主義に由来する進歩史観が改めて議論の対象となっている。何を基準として進歩と見なすのかという問いは容易には答えのない難問である。進歩史観を批判したメンデルスゾーンの思想は現代においてもアクチュアリティを失ってはいない。

最後に11月のアメリカでの研究成果について報告したい。11月に、ゴットリーブ氏の支援のもとで、ニューヨーク大学のユダヤ学部で、日本におけるドイツ・ユダヤ思想の受容に関する研究会「Unexpected Affinities: Japanese Reception of German Jewish Thought & Culture」を開催した。北海学園大学の佐藤貴史氏と共に登壇した。

私は「Modern Japanese Culture and Moses Mendelssohn」というタイトルで報告を行い、近代の日本人と近代ドイツのユダヤ人が近代西洋文明に出会ったときの問題状況を比較検討した。内容は以下の通りである。日本では、江戸末期から、キリスト教（特にプロテスタント）の宗教理解の受容を通して、自分たちの宗教を再定義する必要性に迫られることになった。この点については、近代ドイツのユダヤ人たちの場合も似たような状況にあった。

宗教の基本用語の翻訳作業は、それぞれの宗教が使用する言葉の意味の違いをあぶりだすものである。日本では、江戸末期以降、外国との通商を開始する過程で、religionの翻訳語としての「宗教」が、キリスト教を含む様々な宗教を包括する言葉として使われるようになった。しかし、「宗教」は、日本の宗教を表現する言葉として、完全に定着しているとは言い難い部分がある。それは、何らかの宗教的实践を行いながらも、自らのことを無宗教と呼ぶ人が多いところにも表れている。さらには、一般的には、日本文化では、「宗教」の中に含まれる「教」という文字にドグマ性を感じ、「教」よりも「道」の文字を好む傾向も見られる。

メンデルスゾーンの場合も、プロテスタントの影響を受けたドイツ語の宗教概念を用いながら、ユダヤ教とキリスト教の意味理解の違いに注意を促している。彼は、ドイツ語のグラウベンとヘブライ語のエムナーの違いを明確化し、ユダヤ教がドグマへの強制的信仰を強いる宗教ではないことを強調した。ユダヤ教と日本の宗教は、プロテスタント由来の宗教概念と対峙する中で、自らの宗教のドグマ性を否定し実践優位の傾向を強調した点では共通する部分があった。これは、二つの宗教の本質的類似性ではなくて、プロテスタント型宗教理解へのリアクションとしての共通性であると解釈できる。報告の末尾では次の点を指摘した。さまざまな概念はその文化的コンテクストを超えて簡単に翻訳することはできないが、その一方で、翻訳作業には、新しい思想が生まれ、それぞれの文化を豊かにする可能性がふくまれていることも決して見逃してはいけないだろう。

佐藤氏は「Leo Baeck and Tetsutaro Ariga」というタイトルで講演を行い、レオベックと有賀鉄太郎の書簡上の交流について報告した。日本では、当初は、ユダヤ教の知識は、キリスト教神学者や、あるいはアンチセティズムの言説を弄する人々を媒介にして受容された経緯があった。それゆえに、有賀はベックの『ユダヤ教の本質』を翻訳することでユダヤ教の正確な理解を紹介しようとしたのである。

研究会を通して明確になったことは、言うまでもないことではあるが、キリスト教は、西洋ではマジョリティの宗教であったが、日本ではマイノリティであったという点である。ユダヤ教とキリスト教の関係について考察する場合に、西洋と日本とでは大きなコンテクストの違いが存在しており、この点はいつも念頭に置く必要があるだろう。さらに、研究会の後で、ゴットリーブ氏から指摘を受けたことで再認識した点であるが、ユダヤ教にはドグマがあるのか否かという議論は、19世紀 - 20世紀のユダヤ思想において一つの大きなトピックスを形成した。この議論の発端はメンデルスゾーンの思想のうちにあった。そもそも啓蒙思想は一般的に宗教のドグマ性を批判する傾向があるわけだが、その中でのユダヤ思想の特徴を考えていく必要があるだろう。この問題は今後の研究課題となる。

ニューヨーク滞在中には、レオベック研究所やニューヨーク公共図書館のユダヤ部門を訪問し、現地のディレクターや司書の方のサポートを受けながら、文献収集を進めることができた。コロンビア大学では、ファイナー氏と並ぶユダヤ啓蒙思想の著名な研究者であるソーキン氏の講演を聴講する機会も得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 93
2. 論文標題 丸山空大『フランツ・ローゼンツヴァイク - 生と啓示の哲学』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 81-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ミヒヤ・ゴットリーブ	4. 巻 33
2. 論文標題 モーゼス・メンデルスゾーンの現代性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 50-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 シュムエル・ファイナー	4. 巻 33
2. 論文標題 ユダヤの伝統への挑戦	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 シュムエル・ファイナー	4. 巻 10
2. 論文標題 モーゼス・メンデルスゾーン - 神話、歴史、宗教的寛容を求めるユダヤ教徒の闘い-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 176-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ミヒヤ・ゴットリーブ	4. 巻 10
2. 論文標題 ドイツのユダヤ哲学が辿った二つの道：モーゼス・メンデルスゾーンとフランツ・ローゼンツヴァイク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 136-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 14
2. 論文標題 書評論文：山下和也『カントと敬虔主義』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代カント研究	6. 最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 92
2. 論文標題 メンシングの宗教的寛容論の現代的意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 183 - 184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 34
2. 論文標題 書評論文：ジョナサン・イスラエル、森村敏己訳『精神の革命』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本18世紀学会年報	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 25
2. 論文標題 自我と悪：西谷啓治と近代西洋哲学の対話	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 シェリング年報	6. 最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 497
2. 論文標題 現代社会に求められる寛容とは	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 TASC MONTHLY	6. 最初と最後の頁 6 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 91(2)
2. 論文標題 書評と紹介 山本伸一著『総説カバラー -ユダヤ神秘主義の真相と歴史-』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 315-319
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 後藤正英	4. 巻 91
2. 論文標題 ユダヤ教の倫理的評価の転回 -ユダヤ・カント主義を中心に-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 47-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ライナー・フォアスト(翻訳者:後藤正英)	4. 巻 1126
2. 論文標題 寛容と進歩	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 4件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Masahide GOTO
2. 発表標題 Modern Japanese Culture and Moses Mendelssohn
3. 学会等名 Lunch Colloquium of Skirball Department of Hebrew and Judaic Studies at New York University(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 道徳の進歩をどのように理解すべきか - カントとメンデルスゾーンの論争から考える
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 不寛容を生き抜く技法 - メンデルスゾーンとラーヴァター事件
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 シュムエル・ファイナー
2. 発表標題 ユダヤの伝統への挑戦 - 18世紀ヨーロッパにおける楽しみ、文化変容、世俗化
3. 学会等名 「ユダヤ啓蒙思想とメンデルスゾーン」科研費東京講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ミヒャ・ゴットリーブ
2. 発表標題 モーゼス・メンデルスゾーンの現代性：マイノリティにとっての教訓
3. 学会等名 「ユダヤ啓蒙思想とメンデルスゾーン」科研費東京講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 シュムエル・ファイナー
2. 発表標題 モーゼス・メンデルスゾーン - 神話、歴史、宗教的寛容を求めるユダヤ教徒の闘い
3. 学会等名 「ユダヤ啓蒙思想とメンデルスゾーン」科研費京都講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ミヒャ・ゴットリーブ
2. 発表標題 ドイツのユダヤ哲学が辿った二つの道 モーゼス・メンデルスゾーンとフランツ・ローゼンツヴァイク
3. 学会等名 「ユダヤ啓蒙思想とメンデルスゾーン」科研費京都講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 メンシングの宗教的寛容論の現代的意義
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 カントの啓蒙
3. 学会等名 科研費公開研究会 「啓蒙主義の歴史と可能性 - カントとフーコー」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 ユダヤ教の倫理的評価の転回 - ユダヤ・カント主義を中心に -
3. 学会等名 日本宗教学会 第76回学術大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本ユダヤ学会 http://www.jewishstudiesjp.org/ 京都ユダヤ思想学会 https://sites.google.com/site/kyotojewish/ ゴットリーブ氏（ニューヨーク大学）ホームページ http://as.nyu.edu/content/nyu-as/as/faculty/michah-s-gottlieb.html ファイナー氏（バルイラン大学）ホームページ https://jewish-history.biu.ac.il/en/node/553 日本宗教学会 パネル報告・特別セッション要旨集一覧 http://jpars.org/annual/panels-special-sessions レオベック研究所：ニューヨーク訪問記事 https://www.lbi.org/news/Some-Lost-Some-Gained-in-Translation-Between-Japan-and-Judaism/ ニューヨーク大学：研究会紹介サイト https://as.nyu.edu/hebrewjudaic/events/fall-2019/lunch-colloquium-with-masahide-goto-and-takashi-sato.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----